

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 山下 英夫

論 文 題 目

フロベールの写実主義とグロテスクの<美>

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	松澤和宏
委員	名古屋大学	教授	中村靖子
委員	名古屋大学	准教授	重見晋也

論文審査の結果の要旨

本論文は、写実主義の鼻祖と呼ばれるギュスターヴ・フロベールにおけるグロテスクの美学を多角的な観点から解明しようとしたものである。

第1章「グロテスクの歴史的考察」は、グロテスクという語の定義の歴史の変遷を概観している。洞窟に描かれた過剰な装飾模様を指していた16世紀の意味から「異質な要素の混合」を意味するようになり、そこから「風変わりな」という意味を持つ日常語として用いられるようになったこと、そして18世紀以降この語は滑稽さを意味として含むようになり、19世紀のロマン主義においては「ファンタスティック」の類義語として用いられるようになったことなどが明らかにされている。

第2章「近代人とグロテスク」では、知的でありながら愚かな存在でもあるブルジョワが矛盾と過剰を抱え込んだはらんだ存在であるがゆえに、グロテスクな性格を帯びることに焦点が当てられている。フロベールが少年期に創造したギャルソンという登場人物『ボヴァリー夫人』の薬剤師オメが体現しているのは、自己崇拝をしながらも自嘲するにいたるブルジョワの姿である。

第3章では、グロテスク概念を滑稽さとの関連で検討し、『感情教育』では1848年の二月革命がフランス革命の卑小なパロディとして描かれており、またフロベールが17歳の時の作品『スマール』では笑えない滑稽さという美学が提示されていることに論者は着目している。

第4章「反古典的なく美>としての身体」では、グロテスクが身体と結びつけられ、古典主義が取り上げようとはしなかった死体や腐敗の描写がなされていることが重要な意味をもつことが指摘されている。この観点から論者は『ボヴァリー夫人』におけるエマの死の描写や『サランボー』における死や肉体的苦痛の暴力的描写をエドモンド・バークを参照しながら論じている。

第5章「反道徳的なく美>」は、サドの善悪倒錯の思想の影響のもとで、古典的な真・善・美の調和が崩れていくことを確認したうえで、初期作品の『十一月』のマリヤや『ボヴァリー夫人』のエマを分析しながら、女性が官能性を帯び、卑小と崇高がない交ぜになったグロテスクな存在としてしばしば描かれていることを分析している。

第6章「非合理的なく美>」は、グロテスクが人間の合理主義的な理性を超えた性格を孕んでいることを論じている。初稿『感情教育』のジュールと犬との不可解な遭遇体験は、醜悪なものを含んだ世界の把握という課題を提示しているものと論者は解釈している。また愚かしい存在のうちにこそ崇高さが宿るという点にフロベールのグロテスクの独自性があることを論者は強調し、グロテスクの反転の原理によって、知的に優れたブルジョワが愚劣な存在と化し、一見すると動物的で知的には劣った存在が、その率直さによって崇高さを帯び、自然と一体化する汎神論的恍惚にいたると論者は結論している。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、フロベールの初期の習作から晩年の未刊行作品にいたるまで、また膨大な書簡集を調査し数多くの参考文献を渉猟しながら、多角的な観点からグロテスクの美学に光をあてて分析し、その独自性を明らかにした労作といえよう。

グロテスク概念の歴史的変遷を踏まえ、フロベールがグロテスクという概念を創作の中核に据えるにいたったプロセスを少年期にまで遡って明らかにし、自嘲するブルジョワの矛盾と過剰をはらんだ姿のうちに作家がグロテスクを発見したとする指摘は十分に説得力がある。また様々な作家たちから多大な影響を受けながら、フロベールがグロテスクの美学を独自に展開していることを詳細に解き明かしている点も高く評価できる。とりわけラブレールの風刺的な笑いやユゴーのグロテスク概念との相違を明らかにして、フロベールのグロテスク概念がもつ形而上学的射程に光を当てたことは瞠目すべき成果である。

さらに同時代の支配的な思潮であった進歩主義思想やスピノザの汎神論との関連など多岐にわたる諸問題を、グロテスク概念との関係において意欲的に取り上げている姿勢も評価できる。これまでグロテスクの美学との関連ではあまり論じられることの少なかった領域にまで検討対象を拡大することによって、この美学的概念の政治的あるいは宗教的な含意を明らかにすることに成功している点もフロベール研究への貴重な貢献である。またフロベールの主要作品のみならず、初期作品や膨大な書簡を丹念に精査したことにより、実証性の高い論考が展開されている。

一世紀半にわたるフロベール研究史のなかでも、グロテスクに触れた論考は少なくないが、フロベールのグロテスクの美学の独自性とその具体的な諸相を正面から取り上げてこれほどまでに多角的に、また詳細に論じた研究は、これまでにほとんど存在しない。本論文は、フロベール研究への貴重な貢献であり、資料的な価値をも有するものであると高く評価できよう。

ただし、本論文にまったく問題がないわけではない。作家の美学をもつばら問題にしたために、作品論の枠組みがあらかじめ取り除かれている点が惜しまれる。作品や書簡からの断片的引用が目立ち、鋭い指摘が多々見られるにもかかわらず、個々の作品全体のなかでグロテスクの美学が果たしている意味や機能を文脈に即してより具体的に明らかにする余地がまだ残されている。

しかしこの問題点は、むしろ今後の研究課題というべきものであり、作家の美学を扱った本論文の重大な瑕疵とはいえないものである。

本論文は、長年にわたる精読と博搜の賜物であり、フロベールのグロテスクの美学を多角的に解明した点において高い評価に値する。

以上のことから審査委員一同、本論文を博士（文学）の学位に相応しい水準の研究であると認定した。